

# 今日の学生気質

## —学生対応をめぐる—

学生サポートセンター・教授  
岡 昌之

教職員による学生対応がどのようなコミュニケーションとなるかは、学生支援に大きい意味をもつでしょう。何らかの援助を求めてやってくる個々の学生がどのような生活状況、精神状況にあるかが対応に当たる教職員の側に見えていれば援助の危険は減り、効用は大きくなるといえるでしょう。学生の求めるものは、簡単な情報から始まって困難な状況の救済策まで多様でしょうが、いずれの場合でも、その学生のコミュニケーションの特徴がつかめているとやりやすくなります。反対に、その学生のコミュニケーション・パターンが見えていないと、善意と責任感で対応しても困難を感じ、疲労感と困惑を残してしまうということもあります。

一人の学生の特有のコミュニケーション・パターンは、その学生の生来の気質や健康状態、家族関係や友人関係、また世代ごとに異なる社会・文化的状況などの多様な要因を含むものです。現代のように社会の変化が激しい時代には、10年ほどの時間的隔たりが大きな意識的差異をもたらす可能性があります。もちろん生来の気質的差異や、地域的差異も重要ですが、情報化に伴う社会・文化的状況の変化が学生の意識に及ぼしている影響は特に大きいものがあるといえるでしょう。

1990年代のいつごろからか、若者の間に「勝ち組」「負け組」という言い方がはやってきました。この奇妙な呼び方は、一時の流行で終わらず今日まで続き、むしろ益々いきわたってきているようです。一言で言えば「競争社会」の現実ということなのでしょうが、競争の過酷さに対する若者の複雑微妙な感じ方が見事に表現されています。今や大きな問題となっている「ひきこもり」の問題は、このような若者特有の微妙な生活感覚と切り離すことはできないでしょう。少し前に「飽食の時代」といわれたように、基本的には豊かな時代であり、若者の生活におけるパソコンとコンビニがその豊かさを象徴しています。しかしまた一歩間違えば、パソコンもコンビニも今や、精神的に貧しい若者の生活の象徴ということになりかねません。情報革命や流通革命がもたらした豊かさゆえに、若者の精神生活が貧しくなるというのは、皮肉な話です。

ただし、だからといって「今の若者は・・・」という一面的な若者論は有意義ではありません。心理相談員と

しての私の視点からすると、現代のわが国の若者は、基本的に知性にも感性も恵まれた存在であると見えます。情報化時代にふさわしく情報検索の能力と批判力を持ち、美的感受性にも並々ならぬものがあります。逆に言えば、泥臭い闘いに弱く、一人「わが道を行く」というたくましさ欠缺けるといことになるかもしれません。とはいえ、これもあくまで全体的傾向であり、個々の学生に対するときには先入見を持つべきではないでしょう。

よく言えば、おおむね現代の若者は慎重です。これは、豊かな時代に育てられたということでもありましょうが、閉塞の状況という社会的現実の影響をそのまま受けて育った結果ともいえましょう。

いわば「蛮勇」が鮮やかな成果を挙げた場合はともかく、失敗を恐れる心的傾向が一般的です。繊細なのは良いのですが、脆弱では困ります。もっともこれは、若者に限らないかもしれません。激動の時代に、感じやすい若者を指導することは大変な激務となるようです。

このような若者理解に基づき、援助的コミュニケーションの実際について考えてみましょう。若者の広義の「ひきこもり」傾向は、いろいろな形で表れます。情報を求めるが、その背景となる事情を説明しないとか、事態が深刻になっても出てこないとか、こちらが説明を求めても反応が返ってこないとか、いろいろな場合があるでしょう。そのような場合は、当の若者の心の中に深い困惑があると考えする必要があります。その困惑の感じを受け止めて、しばらく待たなければならない場合も多いでしょう。ただ、単に時間が経つのを漫然と待つのではなく、どんなにささやかな変化でも見逃さず、見守っていくことが必要です。一人の若者の心の中の困惑がどんなものであるのかを考え続けていかなければ対応できない深刻な事例も少なくありません。

現代の若者は、対人的距離に敏感です。人と親しくなることを求めながらも、近づくことに関する不安はとて大きいようです。もっとも、これは健全な感覚でもあるようです。幼少期から、親の期待と愛情を受けてきたためか、人間関係に対して微妙な感覚を発達させているのかもしれません。

あるいは、時代的背景もあるかもしれませんが、いずれにしても粗大なコミュニケーションが苦手な、思い

切った発信ができず、ひとり悩むことが多くなるという傾向はありそうです。納得できるコミュニケーションということで、「オタク」的な世界に入っていくということになるのかもしれませんが。

このような精神的特徴をもった若者に対応するには、若者の発する言葉を丁寧にひろいあげ、大切に保持しながらタイミングを計ってレスポンスするということが求められます。非常に骨の折れる作業ですが、次世代を育てるためには大人が引き受けるべき苦役であるといえましょう。これは若者を「甘やかす」ということではありません。「ひきこもり」の若者は、すでにかかなりの忍耐を自己に課しているのです。「ひきこもり」を奨励することはできませんが、禁止することもできません。例外はあるでしょうが、深刻な「ひきこもり」の若者の実感は、いわば「進むも地獄、退くも地獄」というものようです。

そして、このような「地獄」の感じは、このような若者の場合だけではなく、現代においては多くの社会的状況に見られるものかもしれません。その苦渋と忍耐を自他に認識して若者に向き合うことができれば、コミュニケーションの困難は小さくなる可能性があります。「ひきこもり」の難しさは、これを叱咤激励したり非難攻撃してもほとんど改善につながらず、むしろ悪化するこ

ろにあります。そのような若者に関わるのは好むと好まざるに関わらず、相当な忍耐を要しますが、同時にその若者自身も、好むと好まざるに関わらず、大変な忍耐を体験しているのだということを忘れないほうが良いようです。

「切れやすい」傾向ということも言われます。本学の学生は、その傾向は強くありませんが、無縁ということでもないでしょう。これも心身が繊細で、粗雑なコミュニケーションに耐えられないという生理的、ないし心理的素質によるものかもしれませんが、経済競争、情報戦争といわれる現代の社会状況とも無関係ではないでしょう。万事が逼迫しやすく、ものごとを「おいておく」ことがしにくい時代ならではの傾向ともいえましょう。

そのように考えると、「むかつく・・・」という表現の奥には、意外やある種の忍耐、あるいは無理な我慢が潜んでいるということになるのかもしれませんが。実は「むかつく・・・」と言えることで、「切れやすい」傾向を収めているのかもしれませんが、やはり骨が折れますが、このようなことに気づける共感的コミュニケーションによって初めて、若者の危うい自我構造を、より安定した強い自我構造に変換していけるのだということを忘れたくないものです。